

全ての人の好奇心のための博物館を目指して

——南山大学人類学博物館の挑戦——

2017. 10. 6.

南山大学人文学部人類文化学科

黒澤 浩

1. 南山大学人類学博物館の沿革

- 1949年4月1日 南山大学は戦後の新制大学としてのスタート
- 1949年9月1日 「南山大学付属人類学民族学研究所」設立
- 1964年 南山大学、現在の山里町に移転
- 1966年 博物館相当施設の登録申請、翌年認可
- 1978年 人類学研究所は制度改革により、研究所と博物館を分離
- 1979年 南山大学人類学博物館に名称変更
- 2004年 人類学博物館規程の制定
- 2013年 人類学博物館リニューアル

2. 人類学博物館の歴史としての資料収集

(1) 考古資料

①中山英司氏による収集

名古屋市白山藪古墳調査（1950）、西尾市清水遺跡調査（1950）、渥美町（現田原市）吉胡貝塚調査（1951）、知多郡東浦町入海貝塚調査（1951）、名古屋市瑞穂遺跡調査（1951・52・54）、名古屋市高蔵遺跡 D 地点調査（1956）等

②早川正一氏による収集

長良川流域調査、豊田市の行政調査、名古屋市城山古墳の調査

③重松和男氏による調査

高蔵遺跡夜寒町地点出土資料（1985）

④大須二子山古墳出土品（寄贈資料）

⑤グロートおよびマリンガーコレクション（寄贈資料）

⑥購入資料

(2) 民族誌資料

①パプアニューギニア民族誌資料

南山大学東ニューギニア学術調査団収集資料（1964）

ヘンリー・アウフェンアンガー神父収集資料（1960年代以前）

②タイ北部山地民資料

白鳥芳郎教授による「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」（1967～74）収集資料。2000年受入。

③今泉コレクション

故・今泉隆平氏と古物商大橋昭夫氏によるオセアニア民族造形のコレクション。2009年に埼玉県鶴ヶ島市から移管

④倉田勇コレクション

南山大学名誉教授の故倉田勇氏収集のインドネシアの布を中心としたコレクション。2014年受入。

平成 29 年度博物館長研修シンポジウム

⑤西江雅之コレクション

文化人類学者の西江雅之氏が収集されたアフリカ、オセアニアを中心とする世界各地の民族誌資料のコレクション。2015 年受入。

(3) 生活資料

昭和の家電製品、民具等。

3. 大学博物館としての人類学博物館

(1) 大学博物館をめぐる状況の変化

①博物館のイメージ「変・珍・古」

関係者以外知らない… 学内のお荷物的存在…

②大学開放の時代

大学と社会をつなぐパイプとしての大学博物館…という認識

③1996 年「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」(中間報告)

学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会からの報告

④1996 年 4 月 24 日「地域における生涯学習機会の充実方策について」

生涯学習審議会の答申

「2 地域社会への貢献 施設開放の拡充」「2 地域社会への貢献 大学博物館の整備」

→大学博物館に期待されているものは何か？

(2) 大学博物館の性格——大学博物館の二面性

①学内共同利用機関としての大学博物館

- ・専門課程・専門科目での教育
- ・学芸員の養成
- ・学術標本の共有化・活用
- ・教員・院生・学生の研究成果の公開と蓄積
- ・モノを介した新しい横断的研究の開拓

②生涯学習機関としての大学博物館

- ・学術研究の成果の公開
- ・地域連携の中核
- ・専門領域への入口 (入門)
- ・専門領域のリカレント

4. ユニバーサルミュージアムを目指して

(1) 利用者主体の博物館学の提唱

布谷知夫氏による「利用者主体の博物館学」の実践…第三世代博物館の実現へ

滋賀県琵琶湖博物館、三重県総合博物館 (Miemu) などでの実践⇒博物館利用者とは誰か？

(2) ユニバーサルミュージアムの時代

①濱田隆士氏 (神奈川県立生命の星・地球博物館) によるユニバーサルミュージアムの提唱

「ユニバーサルデザインを展示企画の指針として利用するだけでなく、すべての人にやさしく、資料の収集・保存、調査・研究、展示、学習・普及の四つの柱の機能が全体としても充実するようにデザインされた開かれた博物館づくり」

平成 29 年度博物館長研修シンポジウム

② 広瀬浩二郎氏（国立民族学博物館）によるユニバーサルミュージアム活動

ユニバーサルミュージアム研究会によるハンズオンを使った新しい鑑賞体験に関する研究活動
視覚障害者を能力に欠けた人と見るのではなく、「触常者」として触覚を使う健常者であることを強調する

→バリアフリー的な解決ではなく、積極的な価値を実現する解決策として一般化し得る可能性

「視覚障害者にとって楽しい博物館は、晴眼者にとっても楽しいに違いない」

(3) 2013 年のリニューアル

① 広瀬浩二郎氏との出会い⇒ユニバーサルミュージアムへと大きく舵を切った瞬間

② 「触る展示」の実現に向けて

視覚障害者によるアドバイス…名古屋ライトハウスの協力

⇒わからないことは当事者に聞け！！

(4) 「触る展示」の可能性

① 障碍のある人たちが来館者として対象化されること

→博物館は、実は誰にでも開かれているわけではない???

② 展示物に対する距離の近さが生み出す、資料に対する親近感

③ 出来事を説明するのではなく、展示物自体に関心を持ってもらうこと

→歴史系博物館にもかかわらず、鑑賞体験を重視する博物館へ

→そのために展示構成を基本的には時系列で配置していない

④ 学習プログラム作成における自由度の高さ（選択肢の多いこと）

(5) 様々な工夫

① 展示替えのし易さ…キャプションは紙一枚！

② 点字による説明

③ 多言語表記の採用

現在、日本語・英語・中国語・スペイン語・アラビア語・フランス語・ポルトガル語がある

④ イスの配置

⑤ 床の仕様の違い

(6) スローガンは「全ての人の好奇心のために For Everyone's Curiosities」

① 「全ての人」を対象とするとしたときに、全ての人とは誰かが問題化される

② 「好奇心」とは博物館という存在が成立するための根源に根差す「動機」である

(7) 課題と限界

① 展示制作の大変さ

② 資料管理の難しさ…破損・劣化対策、盗難防止、防災対策等

③ 目指すべきユニバーサルミュージアムの具体的な形が存在しない

④ どの館でも実現可能なわけではない

人類学博物館で実現できたのは、小規模であること、そして大学の博物館であること

6. 人類学博物館の進むべき道

(1) 「触る展示」を極める

ユニバーサルミュージアムは理念である。その理念にしたがうならば、全ての障害者・社会的弱者に対応することが必要になる。だが、現実にはその実現は難しい…

平成 29 年度博物館長研修シンポジウム

その目標をあきらめるわけではないが、全面的な触る展示を作った以上、触る展示を極めるのも一つの方向性であると考えた。

⇒資料に触るワークショップの実施

(2) 年齢を問わず楽しめるプログラムの提供

ほとんどの人は博物館の使い方、展示物から何事かを引き出すことができない

⇒それを逆手にとれば、子どもから大人まで一つのプログラムで対応可能である

(3) 「閑」のある生き方を提供できる博物館を目指して